

震災、そして五年 語るべき芸術

野田正彰

要旨

阪神淡路大震災から五年、私たちは何を体験し、いかに耐え、悲しみ、今どこに居るのだろうか。

震災後しばらく、もうりっぱな家具や高価な食器には関心はなくなったとか、土地所有のはかなさを感じるとか、ゆとりや優しさを大切にしようといった会話がかわされ、世相が変わると予測する人さえいた。本当にそうだったのか、何が変わり、何が不変だったのか。

キーワード 阪神淡路大震災、震災と芸術、復興

はじめに

いずれにせよ、大きく何かが変わった。一九九五年一月十七日午前五時四七分、あのときから変わってしまった時間を求めて、二〇〇〇年一月、兵庫県内では「震災と芸術」の企画展が各地で開かれた。百数十作品を集めた兵庫県立近代美術館の「震災と美術 1・17から生まれたもの」、四人の芸術家の震災関連作品に絞り込んだ芦屋市立美術館の「震災と表現展」、西田真人の日本画「震災の記憶」を並べる神戸市立博物館などである。美術だけでなく、伊丹の岡田屋酒蔵（重要文化財）では「表現と震災一俳句の場合」と題して討論会も開かれた。

とりわけ兵庫県立近代美術館の「震災と美術」¹⁾展は、平井章一、江上ゆか学芸員による優れた企画によって、この五年間の震災をテーマとした作品がほぼ網羅されている。彼らはこの五年間の新聞スクラップ、神戸大学図書館の震災文庫などを調べ、震災を表現したほとんどの芸術家に連絡をとり、作品を集めた。当初からこの企画展が予告されていたわけではないので、すでに壊された作品も多かった。それらの何点かは、依頼によって再創作されている。

この兵庫県立近代美術館の展示を中心に、他の美術館の企画を加え、芸術家たちは震災と震災後をどのように描いたか、考察してみよう。

1) 平井章一、江上ゆか他編；震災と美術—1.17から生れたもの—、兵庫県立近代美術館、2000年1月。



井上廣子「魂の記憶 98. 7. 25—220」〈作品1〉

I 畏敬から復興のファンタジーへ

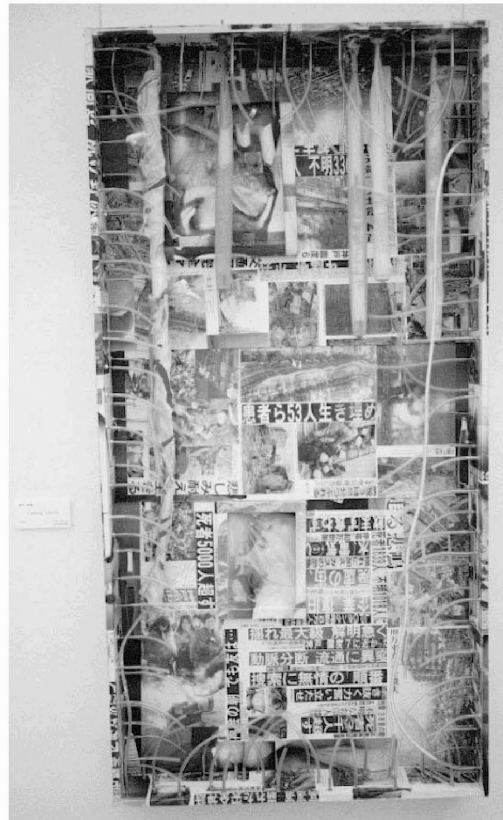
あの朝、それから数日後、消防レスキュー隊の車、消防車、トラック、クレーン車が行き交うなか、芸術家たちも呆然としていた。やがて彼らはどうしても「描かなくては」と自分を駆り立て始める。あるいは「画家にできるのは描くことなのよ」との呼びかけに、応えようとする。

だが、瓦礫と悲嘆の街で画布を立てるのには、心理的な抵抗があった。「芸術に何の意味があるか」という自問は、通行人の拒否的なまなざしに投影され避難されているように思える。誰もが生きるのに必死なとき、なんのための芸術か。この問いは、日本の芸術家が久々に直面した問いであり、そこに新しい表現の可能性が秘められていた。こうして描き抜いた作品が、その答えである。

まず第一に、多くの芸術家は建物の破損に驚愕し、破壊の跡を直視することによって、効用価値を失ったオブジェの美しさ、さらに地震への畏敬すら感じるようになっていく。当時九十歳になる日本画家・^{じきはらぎよくせい}直原玉青が六曲一双の屏風に描いた「阪神大震災之図」、震災地の多様な光景を描いた長尾和のスケッチ——それは詩画集『鎮魂と再生のために 長尾和と25人の詩人たち』²⁾に収められている——がある。

田中徳喜は震災を記録しようとしてカメラを持ったが、ファインダーで切り取られた光景を直視

2) 長尾和と25人の詩人たち；鎮魂と再生のために—阪神・淡路大震災をふりかえって、風来舎、1996年1月。



田中徳喜「こわれた空 5.45—20」〈作品2〉

できず、少したってから新聞の写真、記事、そして本、ガラス、ビニール、鉄を使って、瓦解したビルに埋もれた人間を表現する。この「こわれた空5:45—20」〈作品2〉と題する作品は、あの日をフラッシュ・バックさせ、抑圧しても抑圧しきれない精神的な外傷を鋭く定着している。

あるいは破壊への驚きと畏敬を描いた後、なおも描き続けることによって自らを癒し、復興へのファンタジーへ移っていった芸術家たちがいる。建物の破壊を徹底して描いた吉見敏治の灰白の絵は³⁾、人間がでてくる作品になると温かい色彩に変わる。やがて彼の絵に花や祭りが描かれ、色鮮やかに変わっていく。まるで画家その人による芸術療法を見ているようだ。

物の破壊の壮大さを描き、壊れた建物に人間の意思を越えた美を見出しながら、次にはルミナリエのようなファンタジーへと移っていった西田真人の作品も⁴⁾、破壊への畏敬、自己癒しがファンタジーの底流にある。小池照男のビデオアート、津田彩穂梨の「鳥のいない街」も破壊の後に生命、つまり癒しを求めている。

真野麻美は破壊を描かず、焚き火をする被災者「火の守」を描いた後、桜の満開の避難公園に幻想を託す。

しかし、破壊への驚き、癒し、ファンタジーという歩みを取らず、地震の暴力に対抗するかのよ

3) 吉見敏治; こうべ壊滅—阪神大震災 鎮魂の画譜、神戸新聞総合出版センター、1998年9月。

4) 西田真人日本画展; 神戸 光 祈り、風来舎、1997年1月。



東山嘉事「曼陀羅を喰う」〈作品3〉



堀尾貞治「風景、水、火、臭い、音、街」〈作品4〉

うに人間の情念をぶつけた、中西勝の「地震屋の楽隊がやってきた」や東山嘉事の「曼陀羅を喰う」〈作品3〉といった作品がある。自然災害は人間を絶望に投げ込むと共に、逆に興奮させもする。中西は「九五年に起こった二つの大事件に対する私の思いをこめた」とメモしている。いうまでもなく二大事件とは阪神大震災とオウム・サリン事件であろう。東山は黒いポリエチレンの膜で覆った闇の空間に、多数の魑魅魍魎ちみもうりょうを踊らせて、地震で吹き出した人間社会のおぞましさを表現している。ただし両作品とも、諧謔的な感覚を加味している。



金月炤子「閉ざされた時」〈作品5〉

あるいは文明のおごりを否定し、「自然をおそれよ」と伝える上村亮太の「伏流水」や溶けた鉛の管を並べた 榎忠^{えのきちゆう}の「NAGATA-Pb『鉛』」がある。二作品は地震を通して、私たちの生を大地の生命力につなげようとしている。

とりわけ私は、地震後の混沌にこだわり 続ける堀尾貞治^{さだはる}の制作に引き付けられる。彼の多動ともいえる多作ぶりもまた、地震への反応のように見える。彼は芦屋市立美術館で、被災後に阪神の人家^{おお}を被った青のビニールテント 布をひろげ、また二〇〇〇年一月十五日には兵庫県立近代美術館で「風景、水、火、臭い、音、街」と題するパフォーマンスを行った。〈作品4〉

II その時の記憶

「震災と芸術」の第IIの主題は、「止まった時間」、「切断された記憶」である。この流れを「記憶にこだわった芸術」と呼んでもいいだろう。

今井祝雄^{のりお}は瓦礫を配置し、地震が切断した都市の日常を提示する。彼らは震災百日目、「記憶の断片—創造にむけてのガレキ展」(神戸のギャラリー一夢創館)を開いている。瓦礫に、喪われた生活^{うしな}の思い出、再出発のよりどころを求める行為は、震災後によく見られる。壊れた茶碗、アルバムの断片はすべてを喪った人々に、かろうじて過去とのつながりを伝えてくれる。すでに三月に、西法寺(芦屋市)の副住職、上原照子は瓦礫によるオブジェを作成し、海外からの見舞いへの返礼としている。

なお嶋本昭三は、九五年七月、芦屋の旧防潮堤上に瓦礫によるモニュメント 作成を提案している。今井、嶋本、そして先の堀尾ともに旧「具体」(阪神地域の現代美術運動)の会員である。旧具体の会員たちは、震災を芸術表現しようとする強い意欲も持っていた。

地震で「止まった時計」に象徴的意味をこめた作品も少なくない。金月炤子^{きんげつしょうこ}の「閉ざされた時」〈作品5〉は五時四七分で停止した柱時計を震災時の新聞記事のコラージュで囲んでいる。瓦礫のなかに捨てられた時計を撮った写真はよく見られたが、濱岡収^{おさむ}も「涙の時計 西宮市」でハート型

の止まった時計を撮っている。徳田篤彦は「ガイア 1・17」で止まった時計に鉄パイプなどの瓦礫を組み合わせ、銀色に染め、「あの時、神戸は輝いていた」と止まった時計を読み変えている。先に「自然をおそれよ」という地震賛美として取り上げた榎忠の溶けた鉛管の作品も、あの時を象徴した作品ともいえる。

同じく、パリからやってきたジョルジュ・ルースは、ヒビ割れた壁、壊れた階段を修景し、色彩を加え、プリントにおさめた。オランダの作家トン・マーテンスは全壊した家の床、入口の扉や壁をフロタージュすることによって、地震で止まった時間を記憶しようとした。

III 生きる希望

第IIIの流れに、震災による破壊よりも、人と人の連帯、信頼を表現しようとした芸術家たちがいる。

熱田守は引き裂いたキャンバスを糸で縫って、とりあえず社会の修復を伝えようとした。^{とちはら}柄原敏子は「助けを求める人」で建物の底に埋められた人の苦痛を描き、「助ける人」で立ち上がって必死に建物を支える人を描き、二つは相まって人とのつながりを表現した。

希望、再建へのファンタジーのみを表現した芸術家は多い。彼らのなかには震災の現実を直視することができなかつた人もいる。かわりにファンタジーを提示することによって、被災した人々を鼓舞しようとした。

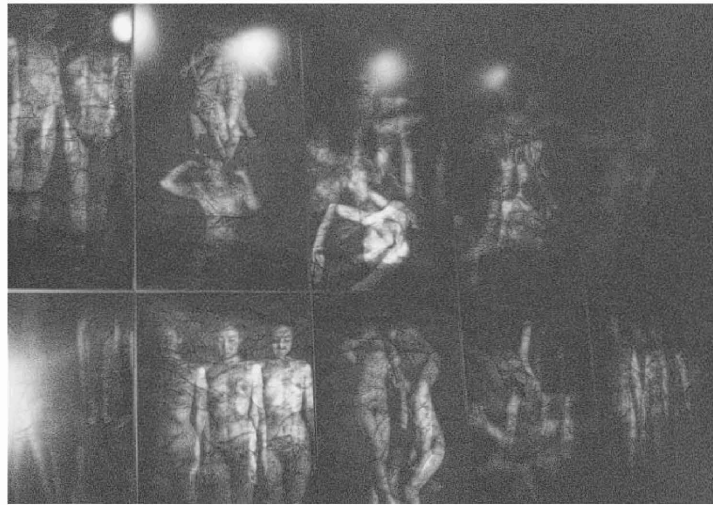
安部はるみは夕日に反照する港町神戸や、空に浮かぶ核家族を明るい色彩で描いた。杉山知子は「たった1000軒の家」で明るい黄色の下地を塗ったキャンバスに毎日何個かの家を描き続けた。彼女は自己へのいたわりが、人々のいたわりになると信じている。満開の桜の花を被災各地で撮影した川廷昌弘^{かわてい}の写真もそうである。

なお多くの写真集が出版されたが、写真家の作品は感傷と甘いファンタジーを伝えるものが多かったように思う。現象にレンズを向ける人は何を伝えるか、造形芸術家以上に考えなければならぬ。だが、破壊の写真から甘いファンタジーへ、安易に流れた作品が多かったようだ。記録にもたれかかり、人間社会の表現にまで到っていないものが多い。

瓦礫の上に希望の旗を立てようとしたデザイナーも、Tシャツで「元気」を謳った芸術家もいる。福井恵子は「六甲アイランド 仮設住宅の旗」などをデザインし、^{わくしま}湧島克己は「ガッツ君」のTシャツを作り、また神戸市元町商店街のフェンスに「見えへんところにもおりませ 友だちがいてよかった」のイラストを描いた。

このような建築仮囲いの壁にライブペインティングを行う社会活動を準備したのは、「アート・エイド・神戸」である。海文堂書店の島田誠社長の呼びかけでつくられたNGO「アート・エイド・神戸」⁵⁾は、阪神地域における芸術活動の復興に大きな役割をはたした。芸術家たちに制作意欲を

5) 島田誠；蝙蝠・赤信号をわたるーアート・エイド・神戸の現場から、神戸新聞総合出版センター、1997年10月。



小谷泰子「Distruction in Blue」〈作品6〉

呼び起こす支援金を提供し、壁画キャンペーンを通して芸術と被災社会とのつながりを提起した。

あるいは詩人たちに呼びかけて『詩集・阪神淡路大震災』（第一集は九五年四月、第二集は九六年一月、第三集は九七年三月）⁶⁾⁷⁾⁸⁾を出版している。詩集は詩人による朗読会に発展した。先に紹介した詩画集『鎮魂と再生のために 長尾和と25人の詩人たち』は、このような「アート・エイド・神戸」のネットワークのなかから生まれたものである。この間の活動は、島田誠の『^{こうもり}蝙蝠、赤信号をわたる—アート・エイド・神戸の現場から』、に詳しい。

さて、話をもどそう。被災地に希望を提示しようとした第Ⅲの流れのなかで、「地震に耐える日常」を伝えようとした芸術家たちがいる。

坂井ユウジローは、絵日記「安のんな大阪からKへ」を描き、支援にかよう周辺の者の眼を通して被災地の日々を伝えた。^{こめたに}米谷昌子は被災住宅地に取り戻された日常生活を写真に撮った。渡辺昌子も、一人ひとりが生きている地所を再確認する写真を撮っている。

剪画作家とみさわかよのは、崩れた街で生き抜く人々の日常を写真に撮り、それを白と黒の剪画で浮きたたせている。彼女は「あれから五年経つが、役立たずの心苦しきも、いっこうに無くならない。作品で他人を励ましたいとか、勇気づけたいとか、そんな気持ちには到底なれない。私の仕事の類は、人の営みの一番最後に来るものだろう。それでも長い月日の中では、必要とされることもあると信じたい」と述べている。ここには芸術家の謙虚な負い目が意識されている。新しい芸術は、このような鋭い芸術家の罪意識の上に生まれるのであろう。

6) 伊勢田史郎ほか編；詩集・阪神淡路大震災、詩画工房、1995年4月。

7) ……；詩集・阪神淡路大震災 第2集、詩画工房、1996年1月。

8) ……；詩集・阪神淡路大震災 第3集、詩画工房、1997年1月。

IV 絶望の中で

次に、第IVの流れは、人間の破壊、悲しみを表現していった芸術家たちである。

地震は建物を破壊し、人間の身体を傷つけ、生命を奪い、心を壊した。物、人、心の順に砕いていった。それ故、物の破壊よりも人の破壊と悲しみこそが芸術の主題であると考えた芸術家がいる。小谷泰子の巨大な写真パネル、崩壊した建物の下に立ちすくむ人々を表現した吉田英智^{ひでとも}のアルミ鑄造作品「1995・1・17 神戸」、澤村隆夫^{ごうか}の劫火にうめく人々を描いた墨絵、絶望と叫びを金と赤の布で構成した滝本^{ぎん}吟の繊維造形「記憶の術— for Kobe —」、子どもたちの悲しみを繊細な線で表現した吉田^{ひろき}廣喜の「子どもたちのシンフォニー」などがある。

とりわけ自身の全身像を重ね、立ちすくみ、うなだれ、あるいは梁^{はり}の下でうめくかのような群像で構成された小谷泰子の「Destruction in Blue」（芦屋市立美術館）は、生と死の地鳴りに翻弄され、悲しみに流され、絶望に耐える人間の精神を静かに表現している。

V 芸術家の努力と可能性

最後に、第Vの表現として、震災後の社会を表現した作品について述べておこう。

やはり多くの作品は建物の破壊を描き、人間の悲哀と希望を描き、そこで終わっている。震災以降の社会がどのようなものだったのか、直視した作品は少ない。

ただひとつ、井上廣子は仮設住宅の鉄骨を組み立て、四つの寝台を並べ、枕の位置に石碑を置いた。ベッドの胸の位置には、看取られることなく流れ出した血液が黒くたまっている。鉄のフレームを透過する光と空気が、日本の行政のもとに、この社会のもとに、生きることの虚しさを伝えている。彼女の「魂の記憶 98・7・25-220」——その日、仮設住宅で孤独死した人は二二〇人にのぼった——〈作品1〉こそ、震災後の現在を表現したものだ。

私は「震災と芸術」展の作品を五グループに分けて解説してきた。

第Iグループは、地震による破壊のすさまじさ、その反応を表現した作品群。そのひとつは、物の破壊への驚きや畏敬であり、第二は破壊を描くことによって癒しを求め、さらに復興のファンタジーへ移っていった流れである。その第三に、地震への対抗暴力を表現した作品。第四に「自然をおそれよ」と地震のエネルギーを賛美するもの、第五に震災によるカオスを描き続けた芸術家を取りあげた。

第IIグループは、記憶にこだわった芸術である。

第IIIグループは、希望を表現しようとした作品。そのひとつは、すぐ復興のファンタジーを夢見たもの、第二は人と人との連帯、信頼を描いた作品、第三は、震災に耐える日常を表現したものがふくまれる。

第Ⅳグループは、人間の破壊と悲しみを描いたものであり、第Ⅴのグループとして、震災後の社会を表現したものについて、述べてきた。

全体を見たとき、芸術家はそれぞれの現在に沈思し、そこからマスコミや行政の気分に流されない、壊れた社会の感情を鮮明に表現してほしいと思ったと思う。もしこのような大震災が北京、ジャカルタ、クアラ・ Lumpur で起こっていたら、中国やインドネシア、マレーシアの芸術家たちは、ずっと強烈な作品を残したのではないかと想像する。

「震災と芸術」の展示は、それでも日本の芸術家の努力とその限界、わずかな可能性を伝えている。

この可能性を用意したのは「アート・エイド・神戸」のような、芸術家同士の会話であり、芸術家と社会の会話である。「もっと語れ、語って描け」と震災と芸術展はささやいているようだ。